

## 2022年4月24日復活節第2主日説教

ヨブ記 42章 1-6節

使徒言行録 5章 12a, 17-22, 25-29節

ヨハネによる福音書 20章 19-31節

復活日は、たくさんの方々とご一緒に礼拝できました。それは、主イエス・キリストの復活と東京聖三一教会を大切に思う皆さまの信仰が、ひとつのしるしとして示された日であったと思います。改めて、そのことを主なる神様に感謝したいと思います。本日から引き続き、A B合同で礼拝を行います。聖歌の奉唱や礼拝の形式など、今後も検討しなければならない課題はありますが、これからも恵みに満ちた礼拝となりますように、心を合わせて行きたいと思います。

さて、復活後の週は、旧約、使徒書のどちらかに、「使徒言行録」が来るように、聖餐式聖書日課が組まれています。その組み合わせ方は、教会によって、また牧師によって異なります。わたしは旧約と使徒書の代わりに「使徒言行録」という組み合わせで日課を選んでいきます。それは旧約があつてこそ、イエス様が来られたこと、ことに復活されたことの意味が明らかになると思うからです。

さて、本日の旧約日課は、「ヨブ記」です。それも最終章です。現在の『聖書』では、42章7節以降（ヨブ42：7-16）が結びとして存在しています。しかし、「ヨブ記」が最初に書かれた時は、本日の箇所まで終了していたかもしれない、と推測されることがあります。あるいは、「ヨブ記」全体の趣旨からすると、本日の箇所までで終了していた方がよい、といわれることもあります。それは、本日の箇所で、ヨブは、人間としての最大の幸福を体験しているからです。

そのヨブが体験した、人間としての最大の幸福とは、「**あなたのことを、耳にしてはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます**」（ヨブ42：5）という節に示されています。ここは直訳しても、単純に、「わたしはわたし目であなた（主なる神様）を見ます」となっています。ヨブは、勘違いでもなく、空想でもなく、自分の目で主なる神様を見たのでした。『聖書』の世界において、主なる神様に創られた人間の最大の幸福は、主なる神様が共にいて下さることです。エデンの園におけるアダムとエバがそうでした。ヨブは、一瞬ではありますが、それを体験したのでした。

それゆえ、そのような体験をしたヨブにできることはただ一つです。それに続く言葉、「**それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し、自分を退け、悔い改めます**」（ヨブ42：6）です。つまり、本来の自分は、塵に過ぎないことを自覚することです。

主なる神様を見ること、それは主なる神様の存在を確認することではありません。一般的な神様に関する議論では、神様の存在が主題になることがあります。しかし、『聖書』において、主なる神様が存在することは大前提です。それゆえに、主なる神様を見たとは、その存在確認ではなく、主なる神様が自分と共にいて下さることをはっきりと認識したことを意味します。それゆえに、そのことは、主なる神様が与えてくださる財産、地位、人間関係、様々な理論、ありとあらゆる恵みを超えるのです。ヨブはすべてを失いました。しかし、その幸福を得たのでした。それゆえに「ヨブ記」の最後は、ここでよいといわれるのです。

本日の聖書日課の後に続く部分（ヨブ 42：7-17）で、ヨブはもとの財産を二倍にして、取り戻します。また多くのそれまでの人間関係を取り戻し、また新たな人間関係を構築します。そして、「ヨブ記」の最後は、「**ヨブはその後百四十年生き、子、孫、四代の先まで見る事ができた。ヨブは長寿を保ち、老いて死んだ。**」（ヨブ 42：16-17）となっています。ここに記される内容も、『聖書』の世界において、主なる神様を信じる人の典型的な恵みの表現、幸福のあり様といえます。しかし、ヨブがそれまで大切にしてきた、そして失った家族・人々が、生き返ったわけではありません。ヨブの生活は、完全に前の状態に戻ったわけではないのです。そのことから考えますと、現在の「ヨブ記」は、最大の幸福で終わるヨブが良いか、財産などを二倍に取り戻し長寿を全うして終わるヨブが良いか、どちらの終わりがよいですかと、読者に選ばせるような、いわゆるマルチエンディングのようになっているとも言えます。

さて、本日の福音書は、「ヨハネによる福音書」です。そして、復活したイエス様が弟子たちに現れたときのお話です。ただし、単に復活したイエス様が現れたという単純なお話ではありません。少し前から内容を確認してみますと、弟子たちは、その代表であるペトロが、空虚の墓を確認し（ヨハネ 20：1-10）、イエス様の復活をマグダラのマリアを通じて、伝えられていました（ヨハネ 20：1-18）。ここから本日の箇所ですが、しかし、弟子たちは、明確な信仰に至らずユダヤ人たちを恐れて家に鍵をかけて閉じこもっていたのでした（ヨハネ 20：19-23）。本日の箇所の後半部では、有名なトマスが、最初は信じないと明言もしていました（ヨハネ 20：24-29）。そして、最後に福音書が書かれた目的が明記されます（ヨハネ 20：30-31）。

このような本日の箇所には、イエス様の復活を題材としていることもあり、いろいろな大切なポイントがあります。最初のお話では、イエス様が弟子たちに息を吹きかけますので、聖霊降臨について示していると考えられます。またイエス様は、「あなた方に平和があるように」と三回弟子たちに語りますので、「平和」とは何かについて示しているとも考えられます。復活を明確に疑うトマスの存在も大切なことを示しています。このようにいろいろなポ

イントがあるのですが、本日は、20 節の「弟子たちは、主を見て喜んだ。」という箇所から学んでみたいと思います。

「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた」(ヨハネ 20：19) とある通り、弟子たちは、マグダラのマリアからイエス様の復活を告げられましたが、家に鍵をかけて隠れていました。お話の流れとしては、自分たちの先生であるイエス様が逮捕され、十字架と言う無残な死刑によって殺され、まだ三日しかたっていないのですから、彼らが恐れるのも無理はないかもしれません。しかし、お話は、「そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』」と言われた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹とをお見せになった」と急展開します。鍵がかかっているのに、イエス様はどうやって入ったのだろうか？という疑問も発生しますが、不思議なのは、「弟子たちは、主を見て喜んだ」とお話がさらに急展開することです。しかし、ここに「ヨハネによる福音書」の特徴があるのです。

マタイ、マルコ、ルカの福音書では、イエス様は、受難予告という形で、これから起こるご自分の十字架での受難と死、そして復活について前もって告げます。そして、物語の展開に応じて、そのことが起こります。そして、イエス様の受難とは何か、復活とは何かを、読者が理解するように描かれています。しかし、「ヨハネによる福音書」はそうではありません。イエス様は最初から最後まで復活された方であるかのように描かれています。そして、そのことを信じるか否かを問いかけているのです。それゆえに、2 章 22 節では、イエス様が神殿崩壊について言及した際に「イエスが死者の中から復活されたとき、弟子たちは、イエスがこう言われたのを思い出し、聖書とイエスの語られた言葉とを信じた」と語られます。またイエス様は、ご自分を信じる人に「わたしがその人を終わりの日に復活させる」と何度も語ります(6：40、44、54)。また「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。」(11：25)とも語るのです。鍵をかけて、ユダヤ人たちを恐れていた弟子たちが、突然現れた復活のイエス様に会い、すぐに喜ぶというのは、不自然なことです。しかし、イエス様を信じるとはそのようなことである。瞬時に恐れが喜びに変わるような事柄である。「ヨハネによる福音書」はそう語っているのです。

その理由の一つは、「ヨハネによる福音書」は、先に見た通り、「福音書」というイエス様のご生涯について語る物語でありながら、ほかのマタイ、マルコ、ルカとは描き方が大きく異なるからです。マタイ、マルコ、ルカは、過去としてのイエス様の物語を語り、その物語の展開の中で、活動と十字架と復活、そしてその物語に触れている人たちにとっての、イエス様の復活の意味などを告げます。しかし、ヨハネは、イエス様は最初から天地創造の初

めから主なる神様とともに存在するロゴスとして登場し、終始そのような方として歩んでいるのです。それゆえ、物語の中に描かれているイエス様は、過去であり、現在であり、そして未来のイエス様に他ならないのです。それは言い換えれば、イエス様を信じたとき、イエス様はいつでもどこでも、信じる人と共に存在してくださるということです。そして、イエス様を信じた人は、この世界の現在に生きていながらも、同時に終わりの日の復活を経験しているということです。イエス様がともにおられるからです。なんとなく、わかったようでわからないようなお話ですが、これが「ヨハネによる福音書」の特徴です。そして、だからこそ、20章31節で「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである」と福音書が書かれた目的を明確に示しているのです。なぜ福音書を書いたのか、それは読んだ人が復活されたイエス様を信じて、イエス様とともに永遠の命を、今、受けるためにです。ここに、恐怖の中にいた弟子たちが、喜びに変わるという急展開をした理由があります。イエス様がともにおられれば、それで十分なのです。他には何もいないからです。

最初に、旧約の「ヨブ記」について触れました。ヨブは、主なる神様に対しても人に対しても、誠実な生活をしていました。それは様々な意味で信仰者の模範であったと思います。『聖書』という書物全体から見ても、模範的であったといえます。しかし、すべてを失いました。そしてその災難についてありとあらゆる議論を尽くして、しかし、最後には、主なる神様をその目で見ました。そして、それが人間にとって最大の幸福であることを悟りました。「ヨハネによる福音書」におけるイエス様と共にいるという状況は、そのような「ヨブ記」に示される事柄の延長線上にあると同時に、さらにその内容を深めています。人間の死を超えているからです。イエス様を信じるとは、主なる神様とともにいることであり、それは永遠の命を歩むことであると示しているからです。

教会が信じるべきそして伝えるべき信仰はここにあります。そしてここからまことの平和と和解の道が開かれるのです。イエス様が示される永遠の命とは、個人のものであると同時に、全ての人間に開かれているからです。それは、この世界がまことの平和から遠い状況であればあるほど、教会の責任が重いことを意味します。現在の世界は、本当に悲しむべき出来事が多くあります。人と人とが傷つけあう出来事が多くあります。しかし、だからこそ、皆さんと一緒に、わたしたちの教会を通して、永遠の命に生きる目的と希望を置いて、イエス様の平和と和解の福音を、宣べ伝えて行きたいと思います。そして、復活日にわたしたちの信仰がひとつのしるしとなったように、世界がまことの平和になるために、これからもまことの永遠の命を信じまた伝えていきたいと思えます。